

韓国における住居と台所の原初的な概念 —朝鮮時代以前の住居と台所の変遷を通して

Fundamental Concepts of Dwelling and Kitchen in Korea —Transformation of dwelling and kitchen space before Chosun period

禹 在 勇* 田 中 法 博**

Woo Jae-Yong TANAKA Norihiro

1. 研究の背景

1950年代を一つの境として、外来文明が生活のなかに大幅に導入され浸透していった韓国においては、生活と生活空間の成り立ちに大きな変化が訪れた。その時代は、「伝統的な生活様式との決別の時代」という表現が最もふさわしい時代であったといっても、決して過言ではない。そのような現象は、人びとの住居と台所空間のありかたのなかに、典型的に表われた。今日の韓国における住居と台所空間は、1950年代に、それ以前とはまったく異なるかたちで形成されたといえる。

そして、今日、外来文明が生活の隅々にまで浸透していくなかで、多くの国がそうであるように、韓国にあっても、韓国の原初的で本来的な形態、韓国のアイデンティティが見失われかかっている。「古きものは悪しきもの」という極めて単純で平板なものに見方に支配されて、今日の韓国においては、急速に文化の伝統が失われつつある。

われわれは、往々にして、過ぎ去った歴史の価値を見落としがちである。しかし、いずれの国であれ、人びとの生活におけるアイデンティティは、人びとの生活の伝統のなかにこそみられる。いかなる時代にあっても、歴史のなかで築かれ、

継承されてきた人びとの暮らしの伝統は、現実の価値観と未来の発展のために活かすべき、民族の経験の蓄積にはかならない。

本研究は、このような意識を念頭に据え、韓国における伝統的な住居と台所空間の原型、ならびに、その原初的な概念について、考察したものである。

なお、本稿では、朝鮮時代以前(図1)の韓国における住居と台所空間の実態を、主としてこれまでに発見された遺物と文献に準拠しながらみていくことにしたい。ここで、朝鮮時代以前までを対象とするのは、韓国の住居と台所空間の原初的な形態と概念が、そこにこそ、存在していると考えられるからである。

2. 原始・上古時代における住居と台所

韓国における先史時代の住居は、主に堅穴住居である。住居地の平面は、初期にあつては円形、楕円形、方形など多様であるが、後期になるにつれてほぼ長方形に定型化されていく。また、住居地の平面も、大きくなっていく。床は、たいがい、土を固めて、堅くしたものであった。わずかに伝えられるこのような遺跡の状況から、当時の住居と台所空間の様相を推測することができ、先史人たちの住居と台所空間に関する概念の一端をうかがいしることができる¹⁾。

*企業情報学部准教授

**企業情報学部教授

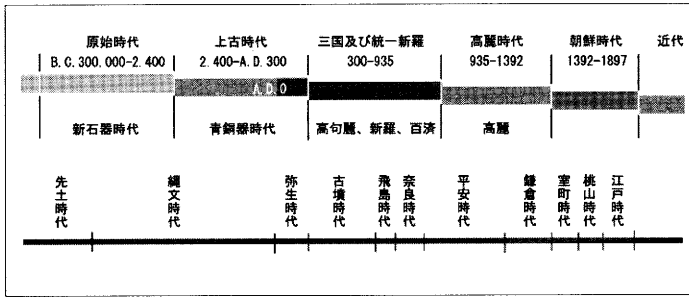


図1 時代年表 (上段：韓国、下段：日本)

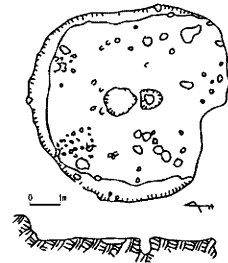


図2 新石器時代の住居 (弓山里第四号住居址)
(出典：『韓国の民家』、古今書院、p.106、1989)

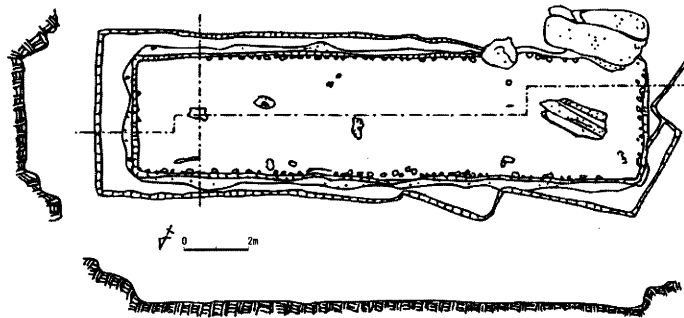


図3 青銅器時代の住居 (坡州郡玉石里住居址・出典：『韓国の民家』、古今書院、p.115、1989)

具体的に、遺跡を観察してみよう。この時代の人びとの生活の様子をうかがうことができるものに、紀元前5,000年ごろの新石器時代の遺跡といわれる、平安南道弓山里 (図2) がある。それは、垂直に土を掘り、その上に屋根を被せた竪穴住居である。この遺跡の平面は、幅が5.5~6m ぐらいの円形または正方形に近い形状をしている。図面上からおおよそ100cmほど掘り下げられたほぼ平坦な窪地の中央部には、一辺が60cm 程度の爐 (Hwaduck) の跡がみられる。住居の中央部に位置していたこの爐は、暖房や照明のみならず、炊事のために使用されていたと考えられる²⁾。このような爐の役割は、形態こそ異なるものの、その後定着していく台所空間とオンドル (温突) (Ondol) 構造との関係が一体化していく。それゆえ、オンドルに象徴される韓国固有の生活パターンの一つである爐は、この先史時代から継承されてきたものと思われる。

上の平安南道弓山里は今日までに確認されている最古の遺跡の一つであるが、その数世紀後には、住居と台所空間に変化が生じている。すなわち、紀元前1,000年ごろ、韓国は青銅器時代に入

る。この時代、農業の発達がみられ、人びとは、それまでの移動的で非定住的な生活から脱し、一定の場所に定着するようになる。当然、住居形態にも変化が現われるようになる³⁾。すなわち、それまで主流であった正方形に近い円形の平面形状をもつ住居が徐々に姿を消し、農耕生活が定着するとともに、長方形の平面形状の住居に変化し (図3)、その内部空間の面積が大きくなる。また、中央部に設けられていた爐が、居住平面の一角に移る。そして、なかには、二つの爐をもつ住居も出現するようになる。

この二つの変化、つまり、爐の居住平面の中央部から一角への移動、ならびに、二つの爐の出現という現象は、住居空間の内部が、なんらかの生活機能によって、区分・分割されるようになったことをうかがわせる。すなわち、二つの爐のうち、炊事のために使用された爐の周辺空間は、いわば、台所空間として、他の空間と分離されたといえる。台所空間に付帯する施設の一つとして食糧や水などを収納・貯蔵する施設があるが、先史時代の住居遺跡からは、貯蔵孔 (Jeojanggong) が発見されている。その貯蔵孔は、二つの爐のう

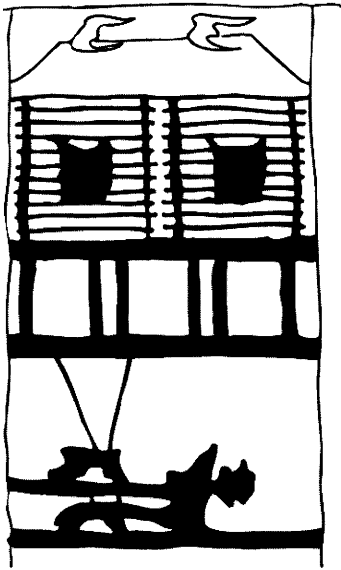


図4 地上住居（出典：「麻線溝」第一号古墳壁画）

ちのいずれかの近くに位置し、大きな素焼き土器の底部を切り取り、底面を上向きにして孔のなかに埋められている。

今日までに発掘されたこの先史時代の住居社の位置からすると、住居を構える場所の選定に当たって人びとが最も大切な要因として考えたのは、食生活である⁴⁾。食物が手近に確保でき、水の供給が近くから可能な地に、たいていの住居が構えられた。人類の住居の本質が「食」と「寝」にあることを考えると、このような住居の位置選定基準も至極当然なことといえるであろう。それゆえ、この時代の住居は、その内部にあって、「食」と「寝」の機能が基本的に可能なかたちで構成された。しかも、初期にあっては、「食」と「寝」とが未分化のままにいわば一体化していた。一つの爐だけが築かれていたことは、よくこのことを示している。このような状態に対し、この時代の後期の住居平面に二つの爐の跡がみられるようになるのは、「食」と「寝」との間に、原初的とはいえ、空間的分離が生じたことを示唆している。すなわち、貯蔵孔が隣接する一方の爐は炊事・調理を中心とする「食」の空間として、また、他方の爐はそれを囲むようにして人びとが休息する「寝」の空間として、それぞれ機能したのである。

このような考察は、韓国における住居建築の形

態的発達過程を系統的に類型化したこれまでの研究⁵⁾に照らしてみても、首肯される。しかし、先史時代の住居にあっては、住居の基本機能である「食」と「寝」との分化が原初的にみられるとはいうものの、それら二つの機能の完全なる分化までには展開されていない。これら二つの機能が空間として完全に独立・分化していくのには、次の時代の到来を待たなければならなかった。

3. 三国時代における住居と台所

三国時代に先行する時代は、元三国時代と呼ばれる。この時代の住居に関してはその詳細が不明だが、次の二点がほぼ明らかになっている。一つは、人びとの寝起きする居住平面が、漸次、グラントレレベルより上部にあがっていく傾向がみられるという点である。もう一つは、甕 (Dok)、倉庫 (Changgo)、宮室 (Gungsil)、牛屋 (Magu)、厠間 (Duisgan) などの名称が使われるようになったという点である。このような現象は、住居空間が複数の独立した空間の複合によって形成され始めたこと、換言すれば、空間の分離が生活機能と対応して進行したことをうかがわせる。三国時代になると、このことがより一層鮮明になる。

ところで、韓国における歴史時代とは、学者によって若干の相違がみられるものの、一般的には、三国時代以降のことである。とりわけ、考古学や美術史の分野にあっては、三国時代以後が歴史時代とされている。しかし、歴史時代に入ったとはいえ、三国時代における住居に関する資料は、文献資料、高句麗壁画、そして、古墳にみられる壁画などである⁶⁾。

周知のように、三国時代に入ると、漢字が使用されるようになり、また、中国大陸から伝えられた仏教が民間にも浸透していく。とりわけ仏教の伝来と普及は、発達した文化が中国大陸から多面的に流入する契機となり、それまでの先史時代における文明の段階を越え、高度に成熟した文化圏を形成する要因になった。住居の構造と機能に関しても、先進的な技術が導入されて、朝鮮時代の住居のそれとたいして変わらない状況を実現するようになっている。当然、台所空間においても、著しい変容が現われる⁷⁾。

この時代の住居と台所空間の様相を、具体的に



図5 住居内部空間の用途別（出典：安岳三号古墳壁画）

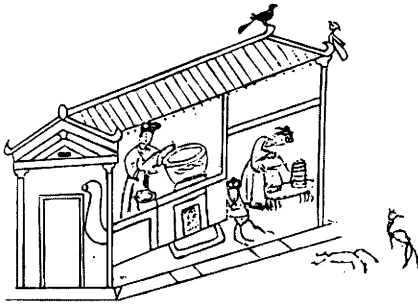


図6 住居内部空間の用途別（出典：安岳三号古墳壁画）

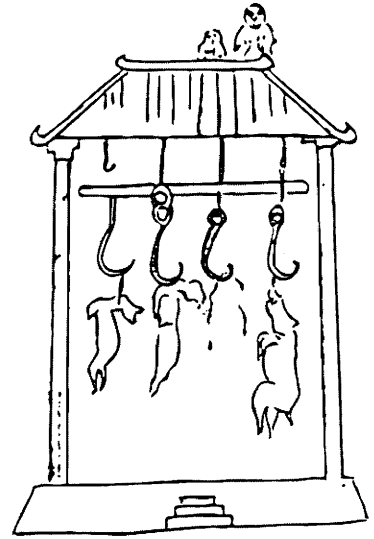


図8 肉庫（出典：安岳三号古墳壁画）

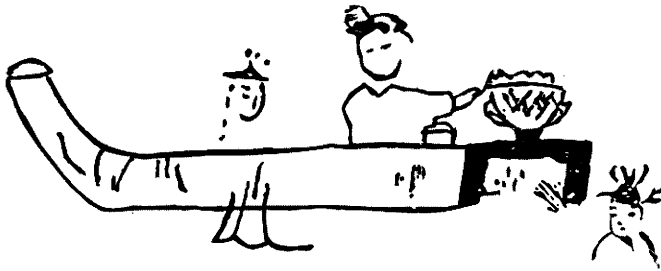


図7 竈と煙突（出典：『薬水里』古墳壁画）

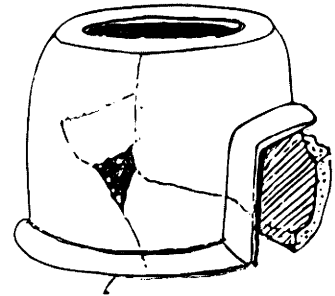


図9 土製風爐（出典：慶州『雁鴨池』出土）

みていくことにしよう。

上述の先史時代に比べ、三国時代の住居形態は大きく変化している。すなわち、中国の歴史書⁸⁾にも記されているように、三国時代初期にあっては竪穴住居が残存しているものの、後期になると、地上住居の形態に発展していった⁹⁾。竪穴住居は人類史の初期におよそ共通してみられるもので、その機能と形態は、概して、いずれの地域、いずれの民族にあってても類似している。これに対し、民族と集団ごとに固有の住居形態が形成されるようになったのは、地上住居が発展してからのことである¹⁰⁾。すなわち、三国時代は、韓国に固有な住居と台所空間の基本形態が形成された時代であるといえる。

三国時代の地上住居の様相は、麻線溝の古墳壁画（図4）に鮮明に描かれている。

また、高句麗の古墳壁画には、三国時代後期の住居がより詳細に描かれている¹¹⁾。安岳第三号古墳壁画（図5）がそれである。この壁画によると、台所や倉庫、厩など、住居の内部空間の用途が多様になっている。また、一つの住居がそれぞれに独立した複数の建物からなっている。そして、オンドルの使用がみられ、炊事・調理の空間が完全に独立している。

いうまでもなく、オンドルは韓国の住居の特徴の一つで、その熱源は、台所空間で炊事のために燃やす焚き火である。民家において炊事と暖房をオンドルというかたちで同一化させたのはこの時代のことであり、また、民家の台所空間が現在の形態とほとんど変わらない状態にまで完成され始めたのもこの時代のことである。安岳第三号古墳壁画からは、民家の側面に立っている煙突が台所

内部の竈と繋がっている様子(図6)がよくうかがえる。

一方、薬水里の古墳壁画(図7)にも、竈の煙と熱を導く長い煙突状のものが鮮明に描かれている。薪の火が燃える竈には釜が据えられ、調理が行なわれている。竈の熱源の活用をうかがわせる貴重な絵画史料である。

また、先の安岳第三号古墳壁画には、豚や鹿と思われる動物が丸ごとS字形をした鉤に吊り下げられている光景が描かれている(図8)。これは、食糧貯蔵の一形態と思われる。今日でも、韓国に現存する地方の上流民家では、「屠場房」と呼ばれる貯蔵庫があり、この安岳第三号古墳壁画に描かれているのとまったく同様の方法で、鉄製の鉤に大きな魚などが吊り下げられているのがみられる。こうして、食糧貯蔵という点においても、朝鮮時代の原形がこの三国時代につくられている。なお、この時代の社会の様相を綴った『三国史記』には、この時代に醤油、味噌などの製造が行なわれ、貯蔵食品の加工に用いられていたことが記されている¹²⁾。

百済の風俗については、『新唐書』東の伝百済条に「俗与高句麗同(習俗については、高句麗と同様)」と記されているだけで、それ以外にはほとんど記録が存在しない。しかし、百済に仏教文化が伝えられてから以降は、上の高句麗とほぼ同様の住居と台所空間の形態になっていたと推測されている。

新羅の住居の様相に関しては、『三国史記』の「屋舎」条¹³⁾にみられる。そこには、新羅における社会的階級ごとの住居の規模、様式、用材の制限などが記され、家屋形態の多様化が進展したことをうかがわせる。また、『三国史記』新羅本紀、「憲康王」条には、「民間の家屋は草屋根ではなく瓦屋根であり、ご飯を炊くのに、木を燃やしたのではなく、炭が使用されている」との記述がみられる。この記録からも、高句麗と同様に、新羅にあっても、朝鮮時代の住居と台所空間の形態に近似した状況が創出されていたことがうかがえる。

総じて、高句麗に比べて資料の少ない新羅と百済の住居ならびに台所空間に関しても、その構造や空間配置の様相は高句麗の場合とほぼ同様であ

ろうとの学説が主流である。ただし、相対的に暖かな気候に恵まれる新羅にあつては、高句麗や百済にはみられない遺物として、いわば移動可能な竈が発掘されている。慶州雁鴨池遺跡から出土した土製の風爐(ブンロ)(図9)がそれである。おそらく、この地域にあつては、真冬を除き、風爐(ブンロ)を台所空間の外に設置し、炊飯をしていたものと推定される。このように、三国時代に、住居と台所空間、ならびに、食生活構造が朝鮮時代とたいして変わらないかたちにまで進化されていた。この時代、住居や台所空間の朝鮮時代に繋がる原形が形成されたばかりではない。食品の加工や調理に必要なさまざまな調理用器具の発展もみられる。とりわけこの時代の上流階級の住居と台所空間は、朝鮮時代とほぼ同等の構造をなし、豊かな食生活文化を実現させる多様な台所器具を整えていた。かくして、韓国固有の伝統的台所空間の母胎はこの三国時代にあるといえる。

4. 高麗時代とそれ以降における住居と台所

中国の『高麗図経』に高麗時代の台所器具の若干の記録がみられるものの、高麗時代の遺跡ならびに現存建物が皆無のため、およそ、この時代の住居と台所空間の様相を詳しく考察することは不可能である。しかしながら、高麗時代の住居と台所空間は、およそ、貴族階級のそれが中国の影響を強く受けているものの、庶民階級にあつては、三国時代からそれに続く統一新羅時代にかけて形成された上述の形態とほとんど変わっていないとの推察がなされている¹⁴⁾。

この時代に関するわずかな記録のなかでも、オンドルについて『高麗図経』に「平凡な一般的事実」¹⁵⁾と記述されているのは、注目に値する。その記述は、三国時代に生まれたオンドル構造が高麗時代には広く普及し、庶民の住居のなかにも定着していたことを示唆している。オンドルが普及・定着していくにつれ、台所空間の内部には、炊飯と暖房の機能を一体化する竈の構造が定型化された。また、それは、上流階級から庶民階級に至るまでのおよそすべての住居のなかで定着した。そして、その流れは、次の朝鮮時代に、地域の個性とも連動したかたちで、韓国における住居と台所空間の典型として定着された。

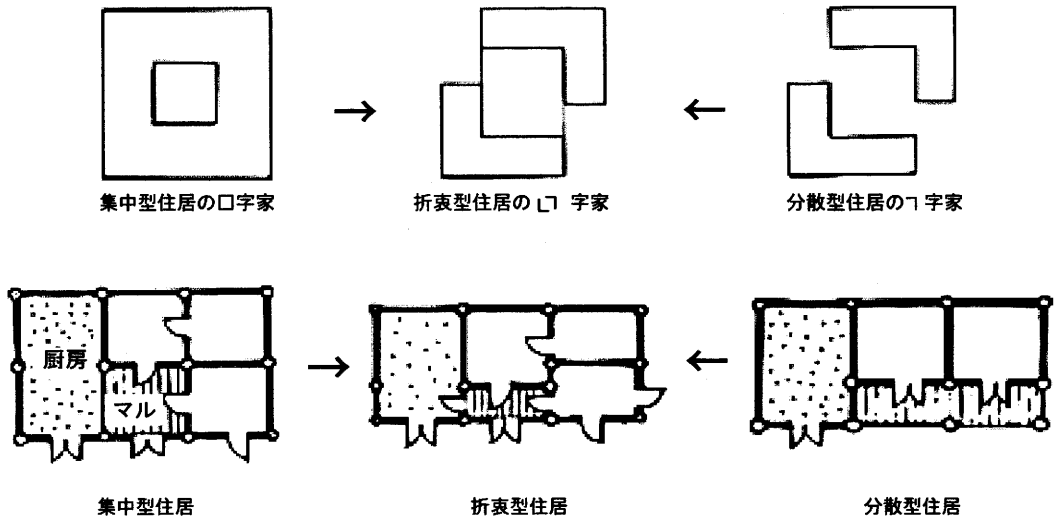


図10 折衷型住居

朝鮮時代は、住居と台所空間が、韓国固有の特徴を有する形態に定着した時代である。その特徴は、概略、次の二点にまとめられる。第一点は、多様な性格と機能を備えた空間構成が定着したことである。また、第二点は、住居空間の意味的構造化がなされたことである。

まず、第一点については、次のようである。庶民階級の一般的な住居の内部空間は、「ケンナバン」「ウッパン」「マルバン」「台所」「サランバン」で構成された。中流階級以上の住居にあっては、これらの他に、「ヘンランバン」「チェンジギバン」「チャンバン」などと各種の「カン」が付帯する。また、これらの階級にあっては、母屋の建物とは完全に分離された別堂と舎堂を有する住居も出現した¹⁶⁾。いずれにしろ、社会的階層を問わず、人びとの住居は多様な性格と機能を備えた空間のいわば集合として構成された。

また、第二点は、風水の概念や儒教思想が重要視され、住居空間の構成に反映されたという特徴である。すなわち、良家の三要素とされる「アンバン」「台所」「大門」を設けるその方向性に関して、禁忌と制約が定着した。また、住居の平面形態にあっては、「壊す」という意味に通ずる「工」の字形、あるいは、死体を意味する「禮」の字形などが、禁忌とされた¹⁷⁾。また、儒教思想が住居や台所空間の形式に影響を及ぼし、上流階

層は、自らの社会的身分の高さを、閉鎖式の建築様式によって表現した。

この二点に加え、朝鮮時代には、下記のように、それぞれの地域環境に適應したかたちで、住居と台所空間の発展ならびに定型化がみられる¹⁸⁾。

〔集中型住居〕韓国の北部は、気候的には南部に比べて寒い冬期間が長く、地形的には平野よりも山地が多い。このような風土に対応するかたちで、可能な限りすべての生活が住居内部において行なえるように、一つの建物のなかに住居空間を納めてしまう「集中型住居」が形成された（図10）。

〔分散型住居〕南部地方は、山地より平野が多く、夏が長くて暑い。そのため、通風性のよい住居構造が採用される。このような地域に、広い庭を中央に設け、それを囲むかたちで数棟の建物が分散して配される住居形式が定着した（図10）。また、この「分散型住居」にあっては、通風がよいように、一列構造をなす「ホッジブ」が発達した。

〔折衷型住居〕北部の「集中型住居」と南部における「分散型住居」などが接する地帯に、「折衷型住居」（図10）が生まれた。その形態的特徴としては、保温性の重視、ならびに、通風と採光の重視がみられる¹⁹⁾。

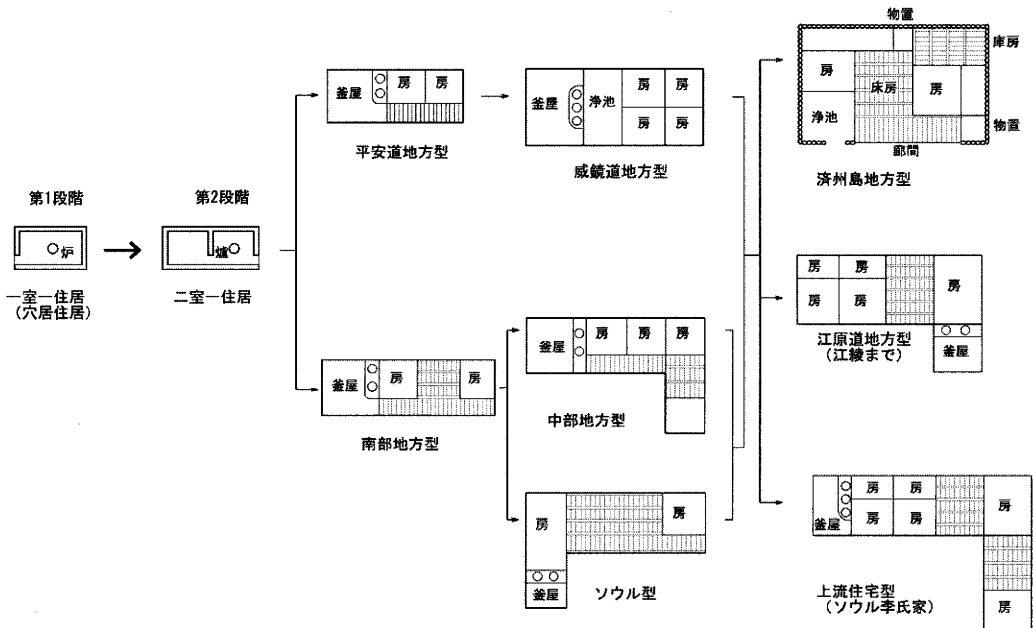


図11 韓国における住居と台所空間の発展過程

この朝鮮時代の住居は、いずれの地域にあっても、機能と動線に対するの考慮があまりなされていない。それは、この時代には、家父長の絶対的権力のもとでの家族制度がとられていたため、住居にあっても、機能的・合理的な平面構成より、権威を表す構成が最も求められたからである。

以上にみてきた韓国における住居と台所空間の発展過程を図にまとめると、図11のように要約される。

ところで、1876年のカンファ調約²⁰⁾を契機として、韓国にあっては、諸外国の物質文化や精神文化が自然のうちに流入するようになった。当然、住居にあっても外来の新様式の摂取が始められたが、全体的には、それまでとたいして変わってはいない。韓日合弁²¹⁾以後も、日本住居の影響を受けてはいたものの、本質的には、あまり変化していない。せいぜい、洋灰やガラスなどの、新しい建築用材が使われるようになった程度である²²⁾。

しかし、1945年以後、とりわけ1950年の韓国戦争²³⁾以後、韓国の生活様式は急激に変化し始めた。例えば、椅子式生活様式が在来の座式生活のなかに浸透し、椅子式と座式の二つの様式が同一の住居のなかで併用される傾向が現われた。また、住宅の外観が洋式または準洋式となり、その

内部にあっては在来の「オンドルバン」と椅子式の「マルバン」が共存するかたちとなった。同時に、寝室が普及し、台所空間の改良も進められた。そして、1980年以後に増築・改築された住宅にあっては、在来の構造がほとんどみられないほどに、徹底した西欧化がなされるようになった。近代社会は、このように、西欧の社会をモデルとしてその歴史を刻み始めたため、西欧社会の生活様式がほとんど無批判のままに受容されるようになった。歴史と風土の異なる西欧社会の生活様式を受容が韓国の人びとの生活と価値観にどのような変化をもたらしていくかはほとんど検討されずに、先進国の生活様式という理由だけから、それらがほぼ無条件に受容されたのである。このいわゆる近代化過程のなかで、それまで伝承されてきた韓国に固有の文化は「古くて捨て去るべきもの」として扱われ、いつのまにか、文化の伝統的脈絡と価値が失われてしまったのである。

5. 韓国における住居と台所の概念

5.1. 住居の概念

以上、韓国における住居と台所空間の歴史的変容過程について、概観してきた。

時代とともに生活様式と社会が変化し、それに

つれて、人びとの住居と台所空間の様相が変化していくことは、およそ、不可避なことである。しかしながら、変化は「発展」である場合もあるが、ときとして、決して「発展」とはいえない場合もあることに、私たちは注意を払うべきであろう。そして、民族が築き、継承してきた生活様式と文化、総じて民族の伝統的生活文化を保存、伝承、発展させることの大切さを、私たちはあらためて自覚すべきであろう。

果たして、韓国にあって、「住居」とは、そもそもどんな意味をもつものなのであろう。

「住居」と同じ意味をもつものとして、「家」の字がよく使われる。この「家」の字は、屋根を意味する「宀」と豚を意味する「豕」で構成されている。それゆえ、「家」には、「屋根の下の豚」というイメージがうかがえる。一説によると、この漢字は、古代の中国人が豚肉が好きだったことからつくられたといわれる。つまり、この「家」という漢字は、決して、「豚の家」そのものから由来したのではない。中国と日本にあっては、「家」という漢字によって、あくまでも、「住まいとしての建物」ならびに「家族」という概念が表現されている。

一方、韓国における「家」は、中国の「家(JIA)」や日本における「家(IE)」と同じく、「建物」「家族構成員」「生活居住地」「家族共同生活」などの意味をもっているが、それ以外にも、「家族」の範囲を越え、「同族」「親戚」までも含む実に幅広い意味を内包している²⁵⁾。すなわち、韓国にあって、「家」は、「家族」「同族」「親戚」そのものとはほぼ同義である。これまで多くの人類学者たちが「同居同財の生活共同体」と呼んできたとまったく同じ意味において、韓国における「家」の概念は「家族」「同族」「親戚」そのものなのである。

人間は、社会を形成し、社会活動を行なうなかで、集団的な生活様式(way of life)を獲得する。このような生活様式から抽出される一つ概念として「文化」という語を当てることができるなら、「家」「住居」は、「文化」の具体的表現そのものである。また、「家」「住居」は、「同居同財の生活共同体」としての「家族」「同族」「親戚」の基本的行為が展開される生活空間にほかな

らない²⁵⁾。

人間は、そのような意味における生活の場として「家」「住居」をつくり、それを質的、量的に改善するための工夫を重ね続けてきた。しかし、その工夫の表現と発展は、その国の自然的、人文的条件によって異なっている。つまり、民族と社会集団によって、「家」「住居」の形式と発展形態、その底流に流れる価値観は異なっている。

「家」「住居」の特質は当該の自然環境、生活様式、社会制度の三つの側面から把握することができるといわれるのは、このためである²⁶⁾。

また、人類学によると、「文化」とは、言語、慣習、制度のように、社会の構成員によって共有され、学習される「知識の体系」である。この観点からすると、「家」「住居」は、一つの「文化」をなしている。すなわち、「家」「住居」は、「文化の産物」であり、「伝統」である。そして、「過去から現在に至るまでに蓄積された行為の体系」を「伝統」とみなすことができるとすれば、生活文化における自己認識こそが、すなわち、「伝統」の体得にほかならない²⁷⁾。

さらに、「家」「住居」は、集団が周囲の環境に適応しながらその生存を確かなものにしていくためにつくられたすぐれて人工的なもの(artifacts, man-made objects)にほかならない。そのゆえにこそ、「家」「住居」は自然環境に影響をもたらすと同時に、日常生活の舞台として、人びとの生活様式にもさまざまな影響を及ぼす²⁸⁾。

このような「家」「住居」の有する本質的概念や特質を考えると、韓国における近代の住居と台所空間のいわば無批判的な西欧化の潮流は、今日の時点で、しっかりと再検討されねばならない。

5.2. 台所の概念

いうまでもなく、食生活は、人類の発祥とともに始まった基本的生活の一つである。そして、民族の食生活は、その民族の自然的環境や歴史、文化に影響されながら、それぞれに独特な飲食物と飲食様式をつくりあげ、それが歴史を通して継承され、やがて、当該の民族に固有な伝統として形成され、定着される。食物を加工・調理する場としての台所空間は、このような食生活と密接に関連した空間にほかならない。

ところで、人類最初の住居としての堅穴住居にあっては、すでにみたように、「食」と「寝」という二つの基本機能が同一の空間内で行なわれていた。それゆえ、新石器時代の堅穴住居内に築かれていた「爐」は、いわば、「食」に対応する炊事機能と「寝」に対応する暖房機能の二つを果たしていた。韓国の台所空間の特徴をなすオンドル構造の原型が、すでに、この堅穴住居のなかにみられるとって過言ではない²⁹⁾。

現在、韓国語では、台所空間は「プオク」と呼ばれる。しかし、崔世珍が朝鮮中宗時代（1522年）に書いた『訓夢字会』によると、「厨」の漢字に「ピオク」とその読みが記されているから、もともと台所は「ピオク」であり、「プオク」はあくまでも現代的な表記である。また、地方によっては台所空間のことが「ジョンジ（カン）」あるいは「ジョンズ（カン）」と呼ばれ、漢字では「鼎目」「鼎厨」「鼎亀」などと表記されていることからすると、韓国における台所空間は、竈（ブツマク）と釜が設えられた炊事のための空間を意味している。

また、韓国においては、台所空間は、「女性の空間」のいわば代名詞であったり、混乱期にあつては「あこがれの空間」の代名詞であったりもした。こうして、台所空間は、韓国の歴史の変遷とともに、その空間的意味も変化し続けてきた。

いずれにしても、住居をわれわれの身体にたとえるなら、台所空間は、その身体全体に栄養分を提供する、いわば心臓の機能を果たしている。そして、それぞれの地域で産出される食糧資源は心臓としての台所空間において加工・調理され、そして身体全体に提供され、悠久の歴史のなかで、「食」生活のみならず、「住」生活全般の慣習を築きあげてきた。いわば、心臓としての台所空間を基点として形成された「食」の慣習は、民族の生活文化全般の本質性、固有性を規定する大きな要因となってきたのである³⁰⁾。

このように考えると、韓国における台所空間の本質性と固有性は、そこが竈と釜が設えられた炊事空間であり、しかも、それのみで完結するのではなく、オンドル構造によって住居空間の全般に連動しているところにあることの意義を、あらためて再評価する必要があるであろう。

ここにおいても、われわれは、西欧文明の台所空間への無批判的な導入について熟考せねばならない。

6. おわりに

本稿の目的は、冒頭にも記したように、韓国における住居と台所空間の原初的な形態とその特質を探ることにある。具体的には、それぞれの時代における住居と台所空間の様相を観察しながら、その変遷を辿りつつ、そこに一貫して流れているいわば民族の本質性と固有性を抽出することにある。

およそ、住居と台所空間の歴史的発展過程は、人間が火を使い、食物加工と調理を行なう所作そのものと、住空間を地域特性に適合したかたちでより快適に形成していくための工夫そのものにほかならない。ただし、上に記したように、韓国にあっては、「火を使って調理・炊飯すること」と「より快適な住空間を形成すること」とが、すぐれて、一体化・連動化していた。先史時代の「爐」と歴史時代以降の「オンドル」とがその物理的構造においては明らかに異なっているものの、その意味的構造の点ではまったく異なっていないところに、韓国における住居と台所空間との一体化・連動化という特性がすぐれて象徴されている。そのことは、住居が一棟であるにしろ、複数の別棟の複合によって構成されているにしろ、意味的構造においてはまったく異なっていない。ここにこそ、韓国における住居と台所空間の成り立ちの、本質性と固有性がある。

いうまでもなく、デザインは、人びとの生活に対するさまざまな要求・願いを現実化していくための、社会的、実践的な行為である。しかし、その要求・願いは、いずれの民族にあつても、その民族が歩んできた歴史的な文脈、すなわち、民族が築き、継承してきた生活文化とその機構の文脈のなかに、しっかりと位置づけられていなければならない。

注

- 1) 尹貞玉：韓国伝統的厨房空間に関する研究、高麗大学校大学院（修士学位論文）、9、1981
- 2) 姜永換：家の社会史、雄振出版社、20、1992

- 3) 姜永換：前掲書、54
- 4) 朴喜顯：国後期旧石器時代の生活と文化、白山学報、76、1975
- 5) 鄭寅国：韓国建築様式論、一志社、1974
- 6) 高麗大学校民族文化研究所：韓国文化史大系、第7巻、118、1979
- 7) 金正基：韓国住居史（韓国文化史大系）、高麗大学校民族文化研究所、147-148、1979
- 8) 姜永換：前掲書、57
- 9) 姜永換：前掲書、57
- 10) 姜永換：前掲書、60
- 11) 高麗大学校民族文化研究所：前掲書、148
- 12) 三国史記、巻第8、新羅本紀第8、神文王三年編
- 13) 高麗大学校民族文化研究所：前掲書、160
- 14) 高麗大学校民族文化研究所：前掲書、162
- 15) 朱南哲：韓国住居建築、一志社、45、1980
- 16) 高麗大学校民族文化研究所：前掲書、169
- 17) 姜永換：前掲書、79
- 18) 姜永換：前掲書、90
- 19) 姜永換：前掲書、96
- 20) 江華島条約（1876年；高宗13年）韓日修好を締結。
- 21) 韓日合併：1910年、韓・日合併条約調印する。朝鮮総督府が設置される。土地調査事業開始。
- 22) 高麗大学校民族文化研究所：前掲書、189
- 23) 1950年6月25日午前4時（韓国時間）、北緯38度線にて北朝鮮軍の砲撃が開始され、30分後には約10万の兵力が38度線を突破し、朝鮮戦争が始まる。（1950年6月25日—1953年7月27日停戦、事実上終結）
- 24) 李光奎：韓国家族における構造分析、一志社、30、1981
- 25) Otto F. Bollnow、李奎浩訳：人間と家（現代哲学の展望）、韓国哲学会編、法文社、28-35、1973
- 26) 姜永換：前掲書、20
- 27) 趙芝薰：韓国文化史序説（探求親書3）、探求堂、223、1964
- 28) 姜永換：前掲書、26
- 29) 金貞培：韓国民族文化の起源（学術研究叢書2）、高麗大学校出版部、1973
- 30) 黄恵性：韓国の味覚、宮中飲食研究院、6、1971